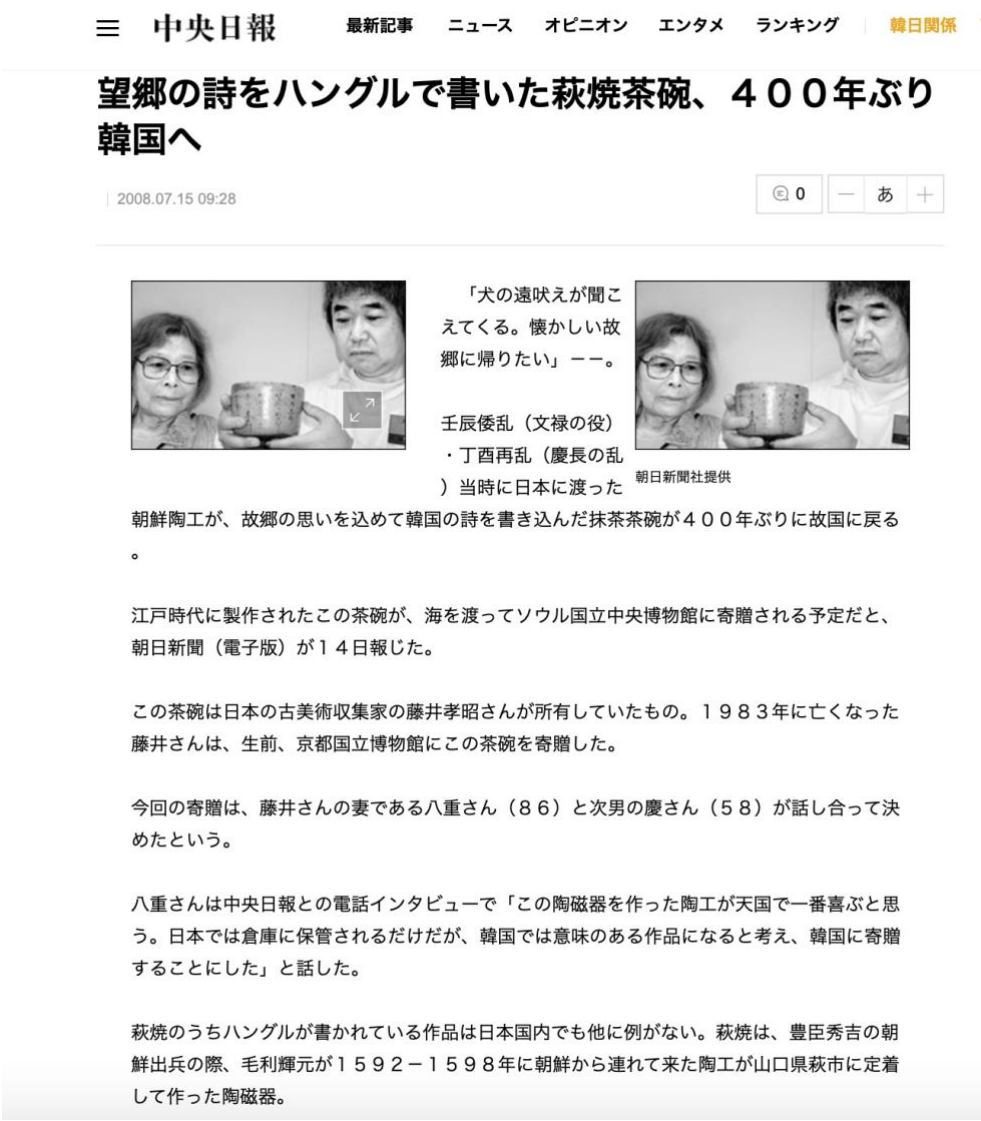
Hans Bjarne Thomsen
University of Zurich, Switzerland

Tracing the History of Surveys in the West: Japanese Art as a Global Study

January 22, 2020

Outline:

Part 1. East Asian art history in Switzerland
Part 2. Surveys of Japanese Art: Shimada Shūjirō and *Zaigai Hihō*
Part 3. The question of national art
Part 4. Case studies of art across and between cultures
Part 5. Japanese art as global art



中央日報　最新記事　ニュース　オピニオン　エンタメ　ランキング　韓日関係

望郷の詩をハングルで書いた萩焼茶碗、４００年ぶり韓国へ

2008.07.15 09:28

「犬の遠吠えが聞こえてくる。懐かしい故郷に帰りたい」ーー。

壬辰倭乱（文禄の役）・丁酉再乱（慶長の乱）当時に日本に渡った朝鮮陶工が、故郷の思いを込めて韓国の詩を書き込んだ抹茶茶碗が４００年ぶりに故国に戻る。

朝日新聞社提供

江戸時代に製作されたこの茶碗が、海を渡ってソウル国立中央博物館に寄贈される予定だと、朝日新聞（電子版）が１４日報じた。

この茶碗は日本の古美術収集家の藤井孝昭さんが所有していたもの。１９８３年に亡くなった藤井さんは、生前、京都国立博物館にこの茶碗を寄贈した。

今回の寄贈は、藤井さんの妻である八重さん（８６）と次男の慶さん（５８）が話し合って決めたという。

八重さんは中央日報との電話インタビューで「この陶磁器を作った陶工が天国で一番喜ぶと思う。日本では倉庫に保管されるだけだが、韓国では意味のある作品になると考え、韓国に寄贈することにした」と話した。

萩焼のうちハングルが書かれている作品は日本国内でも他に例がない。萩焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、毛利輝元が１５９２－１５９８年に朝鮮から連れて来た陶工が山口県萩市に定着して作った陶磁器。

【韓国】表面に「古里に帰りたい」と書かれた韓国起源の萩焼、４００年ぶり韓国へ

懐かしいふるさとに帰りたい――。
ハングルで望郷の詩が書き込まれた江戸期の抹茶茶碗が、京都の古美術収集家の遺族から韓国・ソウルの国立中央博物館に寄贈される。
朝鮮半島から渡来した陶工の思いを託した作品が４００年ぶりに海を渡る。

寄贈されるのは口径約１３センチ、高さ約１１センチの「萩鉄絵詩文茶碗」。
８３年に７０歳で亡くなった京都の古美術収集家藤井孝昭さんが生前、京都国立博物館に寄託した萩焼の作品で、
「犬の遠ぼえが聞こえる。懐かしい古里に帰りたい」という趣旨のハングルが表面に記されている。

萩焼は豊臣秀吉が朝鮮出兵した文禄・慶長の役（１５９２～９８）の際に、
毛利輝元が現地から連れてきた陶工が萩城下（現・山口県萩市）で窯を築いたのが始まり。
寄贈される抹茶茶碗も渡来した陶工が１７世紀初めごろに製作したとみられ、
藤井さんの妻八重さん（８６）ら遺族が話し合い「日韓交流のささやかな一助になれば」と韓国への寄贈を決めた。

里帰りの橋渡しをした京都国立博物館学芸課の尾野善裕さんは「ハングル入りの萩焼は国内には他に例がない。
意義のある帰郷だ」と話す。抹茶茶碗は１７日、八重さんと次男の慶さん（５８）に携えられ、韓国へと渡る。（北垣博美）

朝日新聞
http://www.asahi.com/national/update/0711/OSK200807110055.html